

高画素時代に最適な高密度ディスプレイ

ColorEdge CG248-4K

SPEC

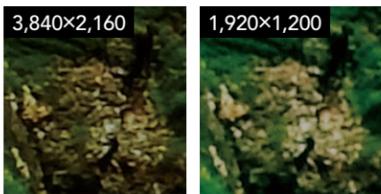
パネル: IPS(ノンフレア) / サイズ: 60cm(23.8インチ) / 推奨解像度: 3,840×2,160 / 視野角: 178度(水平/垂直) / 輝度: 350cd/m² / コントラスト比: 1000:1 / 入力端子: DisplayPort×2, HDMI×2 / USBハブ×3ポート / 大きさ: 553(W)×394~544(H)×245(D) mm / 重さ: 約8.5kg, 約9.2kg(ワード装着時)

● 発売日 2015年7月10日
● 実勢価格 270,000円(税込)
(EIZOダイレクト価格)



文・榎 信康
写真提供・GOTO AKI

4Kなので精細さが圧倒的に違う



一般的な画素密度のディスプレイだと、23.8型の解像度はフルHDくらいだが、CG248-4Kは23.8型のパネルサイズに4Kの解像度を詰め込んでいる。縦横2倍近い解像度のため、画素ピッチは緻密となり、表示も精細だ

キャリブレーションセンサーを内蔵



キャリブレーションセンサー内蔵なのでキャリブレーション後は定期的に自動調整をしてくれて労力が格段に省ける

正面



背面

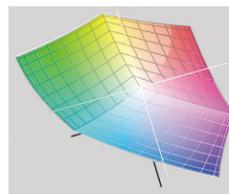


取っ手があるので持ち運びもしやすい



可動範囲の広いスタンドにより、チルト、回転、昇降、縦表示などの調整が可能だ。また、パネルの背面にはハンドルを備えており、デモやプレゼンなどでディスプレイを移動する場合でも楽に持ち運ぶことができる

Adobe RGBカバー率99%の再現性



CG248-4Kは広い色域を確保しており、sRGB(100%カバー)はもちろんAdobe RGB(99%カバー)でも問題なく運用できる。映像用のDCI-P3もカバー率が93%と高く、幅広い用途に対応可能だ

高コントラストで締まりのある黒の表現

IPSパネルは光漏れ・白浮きを抑えるのが困難とされるが、CG248-4Kは1000:1のコントラスト比を確保。暗所での運用が多い映像制作で活躍する。静止画も黒が締まり、シャドウに粘りがある画面は見ている感じが良い



ディスプレイポートは4K / 60pに対応

信号入力端子は、DisplayPortとHDMIを各2つつづつ装備する。4K/60p(60フレーム)表示に対応するのはDisplayPortのみ。HDMI接続時は4K/30pの表示となる。背面にはディスプレイコントロール用のUSBアップストリームも装備する

ColorEdgeシリーズの4Kディスプレイとしては「CG318-4K」に続く2製品目となる「ColorEdge CG248-4K」が発売された。CG248-4Kの液晶パネルは、23.8型とフルHDディスプレイ並みのサイズながら、解像度は4K UHD(3,840×2,160ドット)を実現している。今流行りのHiDPI表示ができる超高画素密度ディスプレイというわけだ。EIZOの23.8型フルHDディスプレイ「EV2450」と比較すると、半分のドットピッチ、倍の画素密度であり、非常に精

細な表示が行える。液晶の駆動方式がIPSということもあり、画面の隅々まで広がる繊細な映像を存分に堪能できる。そのほかのスペックも、輝度350cd/m²、コントラスト比1000:1と高い表示性能を備えており不満はない。

ColorEdge CGシリーズの特徴である内蔵キャリブレーションセンサーも健在だ。カラーマネジメントで最も必要なのは、ディスプレイの状態を維持することだが、これには定期的な調整が必要となってくる。

この労力の大半を内蔵センサーが行ってくれるCGシリーズの快適さを一度味わってしまうと、外付けセンサーで毎回調整する環境にはとても戻ることができない。

ColorEdge CGシリーズの表示品質、快適さにHiDPI表示の美しさが加味されたCG248-4Kは非常に魅力的なディスプレイであり、最高級の表示を求める方、さらにはカラーマネジメントの知識をあまりない人にこそ、全自動で常に正確な色表現を行ってくれるこの製品をオススメしたい。

ADVICE

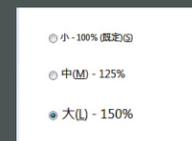
文字が小さい場合は「HiDPI表示」にしよう

CG248-4Kのような超高画素密度(HiDPI)ディスプレイの場合、4Kだからといって作業スペースが格段に広がるということはない。一般的にディスプレイは画素ピッチが0.2mmを切ると等倍表示での文字やアイコンが判別しにくくなる。CG248-4Kのドットピッチは0.14mmであり、等倍表示をすると写真表示は良いが、文字が小さくなりすぎてメニューなどは逆に読みにくくなる。このため、OS側の表示倍率を設定する必要がある。この設定をスケーリングという。CG248-4Kならば倍率200%にすると、一般的な24インチフルHDディスプレイと同等の作業スペース、文字・アイコンサイズとなる。最適なスケーリングの倍率は個々の環境や用途によって変わるため一概にはいえないが、個人的には150%あたりでもテキストの判別性を犠牲にせず、作業スペースを拡大できた。このHiDPI設定への対応は使うソフトごとで事情が異なっている。代表的なところではPhotoshopのCS6は非対応だがCCは対応。DPP(Windows版)もver.3は非対応だが、ver.4では対応している。

4K表示



WindowsでのHiDPI設定



Windows 7の場合はコントロールパネルの[ディスプレイ]を開き[大]を選ぶ。Windows 8の場合は[大きくする]を選ぶ

HiDPI表示



Mac OSでのHiDPI設定



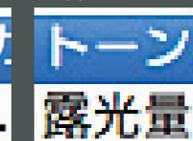
OS 10.9の場合はOptionキーを押しながら[変更]をクリックし、1920×1080を選ぶ。OS 10.10の場合は左から2番目を選ぶ

CG248-4K HiDPI(185ppi表示)



一般的なフルHDディスプレイの場合、画素密度は95ppi前後だが、CG248-4Kは185.1ppiという近い画素密度となっている。縦横が2倍、つまり通常のディスプレイでは1ピクセルで表示されるOS上の1ピクセルが、CG248-4Kでは4ピクセルで表示されるため緻密で滑らかな表示となる

23.8型フルHD(93ppi表示)



GOTO AKIがEOS 5Dsのような高解像度モデルの実力を生かすディスプレイだ



4Kなら100%表示でも全体が把握できる

4K表示で一番圧倒されたのは100%表示での大きさ。画素数が増えるほど100%表示をしたときは部分アップになっていく。それがこの広さで表示できるとピントを確認しながら、周辺のボケなどの描写チェックも同時にできる

EOS 5Dsでもこの範囲が表示される



高解像度のEOS 5Ds Rを使い始めてから、データを100%表示で細かに確認する機会が増えた。高解像度ディスプレイであるEIZOのCG248-4Kでは、写真データを100%表示で確認しても部分ではなく、写真のある程度全体が把握できるサイズになる。ピントを確認しながら背景のボケ具合なども相対的に確認できるのでデータの全体像が非常に把握しやすく作業がスムーズだ。正直その再現性に「ここまで写っていたのか」と何度も同じ画像を見続けてしまったことを白状したい。EOS 5D Mark IIIのデータでは、25%表示で5~6枚を同時に並列で表示できるため個展やプレゼンテーションの準備もビジュアルで直感的に把握でき、効率的な作業が実感できる。湖の青や山の緑には濃い色から薄い色まで多様な色彩が共存しているが、CG248-4Kでは微細な色や質感の違いもはっきりと表現されるため、データを徹底的に追い込める。印刷やプリントの指示も伝えやすくなり、美しさはもちろんのこと、プロのワークフローの効率化にも貢献してくれる印象だ。

約2,200万画素なら25%表示でタイル上に並べられる

写真を選ぶときに縮小表示にしてタイル上に並べることがある。このときにあまり縮小しすぎるとディテールがつかず、結局確認するために拡大表示をすることになる。EOS 5D Mark IIIの画像を4枚並べてみたがそれぞれ25%だった。これなら十分細部が分かる



デュアルディスプレイで作業効率をアップさせる

私はMacBook Proにディスプレイを繋げて作業をしている。サムネイルなどはMacBook Pro。全画面は外部ディスプレイに表示することが多い。細部を確認するために大きいサイズのディスプレイにする選択肢もあったが、正直CG248-4Kがあれば十分に感じた

